

被ばくの脅威なくして

いわきから自主避難 高校生の鴨下全生さん

ローマ教皇(法王)と再び会った少年の目は、力強さが増していた。東京電力福島第一原発事故で本県から自主避難した高校三年鴨下全生(まつき)さん(も)はいじめを受け、救いを求めて教皇に宛てた手紙がきっかけで今年三月に謁見(えっけん)。東京で二十五日開かれた集会では「僕らの未来から被ばくの脅威をなくすため、世界中の人

が動きだせるようにどうか共に祈ってください」と呼び掛け、握手を交わし抱き合った。

小学三年の時に起きた原発事故で、いわき市の自宅は放射線量が急増。避難先の東京都内の小学校では、すぐにいじめが始まった。転校したが、いじめは続く。鉛筆で太ももを刺され、階段から突き落とされたこともこのまま死ねたら相手の立場を悪くできるかなとも考えた。

出立を伏せて中学に進むと、平和で幸せな生活が訪れた。しかし親友にすら真実を明かせず、原発問題を討論する時も「一般的」な意見しか言えなかった。本当の自分を誰にも見せられない。鬱屈(うつくつ)した気持ちで心が砕けそうだった昨年、支援団体に勧められ、教皇に手紙を出した。返信で頂いたのは謁見の招待状だった。

三月、バチカンの広場で「原発事故の被災者のために祈ってください」とうわすた声で伝えるようになった。聞く勇気をもたらされた気がして、訪問先の欧州で報道メ

この前に立ち、実名を体験を語った。名前を



東日本大震災被災者との集いでスピーチをした(右から)鴨下全生さん、田中徳雲さん、加藤敏子さんと握手するローマ教皇フランシスコ。25日午前、東京都千代田区

明かし、顔を出したことが重くなったと感じる。言葉に伴う責任

新たな関係、連帯に期待

南相馬の同慶寺住職 田中徳雲さん

東京都内で二十五日開かれたローマ教皇(法王)と東日本大震災被災者との集いに出席した南相馬市小高区の同慶寺の住職、田中徳雲さん(とくぐん)は集い終了後、福島民報社の取材に応じた。田中さんは「今回の集いを機に生まれる新たな関係や連帯に期待したい」と

語った。

田中さんによると、八月に南相馬市原町区の復興支援団体「カリタス南相馬」から推薦を受け、出席が実現した。集いで、教皇は田中さんらの名前を読み上げた後に、言葉を書かせた。「現在の地球は疲弊している。私たちは環境の一部として声

を出して行動し、地球を守っていくべきだ」とのメッセージに感銘を受けたい。田中さんは「東京電力福島第一原発事故などの問題は、福島や日本だけが抱える課題ではない。今こそ世界全体が一つになるべきだ」と力を込めた。田中さんは原発事故

に伴い、家族と共にいわき市に避難。現在は南相馬、いわきの両市を行き来しながら住職を務めている。

同慶寺は歴代の相馬藩侯を祭っている。国重要無形民俗文化財「相馬野馬追」の節日に、真前祭を執り行い、騎馬武者の安全と武運を祈る。

再会の場となった二十五日の集会。少し緊張した面持ちで「親愛なるパパさま」と切りに出し、避難生活で死にたいと思うほどつらい日々が続いたと故めて証言。「原発は国策。維持したい政府の思惑に沿って賠償額や避難区域の線引きが決められ、被害者の間に分断が生じた。傷ついた人同士が隣人を憎み合うように仕向けられてしまったと述べ、こうした被害を乗り越えられるよう祈ってほしいと訴えた。

集会後、「思いは伝わったと思う」と報道陣に答えた鴨下さん。教皇からは「覚えていきますか」と尋ねられたとい、「自分の方が聞くところなのに、感動した」と興奮気味だった。